

沖縄声楽発声研究会

2022年より 日本歌唱芸術協会 本部：沖縄



会報 第三号

特集 先師に学ぶ教育の原理と本質-その3

2021年9月

- ミラノにおける留学の歴史と私の沖縄県立芸術大学との繋がり—高 丈二 pp. 1-2
- マエストロはかく語りき [連載-III] ~ラビージャ先生とスペイン歌曲のキーワード
服部 洋一 pp. 3-5
- 音楽の基礎勉強~ピアノの有効性~----- 武田 光史 pp. 6-7
- ヘルマン・ローランド先生からいただいた至高の学び----- 仲本 博貴 pp. 8-9
- 声楽家への軌跡—『師』との創造体験 II ~共演の場での学び・小澤征爾先生~
豊田 喜代美 pp. 10-12
- 首里城破損瓦等利活用による舞台空間の創造と琉球古典音楽パフォーマンスアート
山内 昌也 pp. 13-15
- コロナ禍の診療と歌声の維持----- 喜友名 朝則 pp. 15-16



■ ミラノにおける留学の歴史と私の沖縄
県立芸術大学との繋がり
高 丈二 （声楽家）

先号第二号会報でお話ししましたように、ミラノでの4年間の留学生活が始まりました。ミラノ音楽院は *Corso avviamento* という研究科のコースに入りました。所謂「職業音楽家養成コース」と訳せばいいのでしょうか、将来プロの声楽家として世の中に出るための訓練をするところです。とは言ってもマエストロのレッスンやイタリア語の授業や、身体鍛錬の授業等で結局はカンポガリアーニ先生のレッスン以外は大した事はしませんでした。

しかしマエストロの授業はかなり厳しかったことを覚えています。週に2回か3回のレッスンですが、個人レッスンとは言え、コースの生徒を全員集めて大きなサロンのような教室で、全員が一人一人のレッスンを聴かなければならず、一日がかりの授業です。

10人以上のレッスンですから自分が歌う時などはとても緊張しますが、人のレッスンを聴いているととても疲れます。ですからマエストロの授業があった日は家に帰るともうくたくたです。

私はミラノで車を運転していましたので、いつも授業の後はマエストロを宿舎（ホテル）まで送ることになっていました。そのこともあって、その日の疲れはなおさらです。

マエストロのレッスンは音楽院だけではなく、課外授業も多くしてくれました。例えばマントヴァにあるマエストロのお住まいの近くにある、社交クラブに生徒の何人かを連れて演奏会を開催したり、ミラノにある音楽家の老人ホーム（*Casa Verdi*）での演奏会や、ミラノにある放送関係者クラブ（*Circolo della stampa*）での演奏会等々、課外での実践授業をたくさん開いてくれました。

中でも *Casa Verdi* での演奏会は年に2、3回ありましたが、最高に緊張した演奏会だったと記憶しています。とにかく往年の名歌手達が大勢いるホームですから、自分の歌がどのように評価されるか、まさにノドから心臓が飛び出しそうな思いで歌っていました。でも歌い終わると、皆さんとても暖かい拍手と声援でいつも気持ちよく家路についていた事を思い出します。

又留学中には二つのコンクールを受けました。ひとつはシチリア島のエンナ市で行われた F・P・ネーリア記念国際音楽コンクールで、ネーリアというシチリア島の出身の作曲家を記念したコンクールなので、彼の曲を必ず一曲歌うことが条件付けられていました。そのコンクールでは3位入賞を果たしました。もう一つは、メラノ市というオーストリアの国境に近い町での国際音楽コンクールでした。このコンクールは、オペラのスコア全曲を暗譜して歌うコンクールで、スコアのどの部分を出題されるか分からないといった大変やっかいなコンクールでした。

私はドニゼッティのオペラ「愛の妙薬」の全曲を用意して持って行きましたが、何とか歌い切り、2位入賞を果たしました。今から思うとそんな大変な事をよくもやったなと思っています。そのコンクールが終わった後に、あるオランダのマネージャーがコンクールを聴いていたらしく、私のところに来てオランダの「椿姫」の公演（アルフレード役）に是非出演して欲しいと申し出があったのですが、私はもう日本に帰る用意を済ませていましたので、冷たく断りました。

のちに日本に帰って何十年か経ったとき、ドイツの名 *tenor* ウーヴェ・ハイルマン氏にその事を話したら、彼はびっくりして、そのマネージャーこそヨーロッパでは屈指の名マネージャーで多くの名歌手たちのマネージメントをやっていた人だよと、教えてくれました。

そして「高先生は大魚を逃した」と悔やんでいましたが、私は別に大したことではないと思っています。

その後あるオペラ協会から、ミラノのレオーネ劇場でのロッシーニのオペラ「セヴィリアの理髪師」(アルマヴィーヴァ伯爵役)に出演の依頼があり、マエストロに相談した結果出演することになりました。

何しろイタリアオペラなので言葉の発音やイントネーションを一からレッスンをして頂き、またまたマエストロの厳しいレッスンを受けることになりました。公演は大成功でオペラ協会からも大賛辞を頂き、そのあとヴァレーゼ市での公演も追加になり、私にとっては素晴らしい経験になりました。

そして1972年に帰国後2、3年経ってマエストロカンポガリアーニ氏が日本に来られることになり、その機会にマエストロの伴奏でリサイタルを計画し、虎ノ門にあるイイノホールと、神戸の国際会館でリサイタルを開き、そして皆様の暖かい拍手を頂きました。

次に、私と沖縄県立芸術大学との繋がりは、言うまでもなく私の恩師である渡邊高之助先生ですが、私の拙い記憶からすると平成2年に沖縄県芸は設立され、その時音楽学部長として赴任されていた渡邊先生から、ぜひ大学の教員として県芸に来ようお誘いを受けました。

しかし、さすがに沖縄は東京からあまりにも遠いので重にお断りをしました。

それから3年経って先生からどうしても来てくれと頼まれ、当時県芸に教授として赴任されていた伊藤京子先生からもお誘いを受け、ついに重い腰を上げることにしました。

しかし日本の最南端である沖縄に、なぜ芸術大学が必要なのかと少々疑問を感じたので伺ってみました。渡邊先生の話によれば、沖縄に芸術大学を設置した大きな目的は、実は琉球音楽を保存し発展させることに、その主な目的があると伺い、私はその話に感動し、十分に納得したというのが正直なところです。

その後、私は県芸が大好きになり、定年を迎えるまで勤めさせて頂きました。

以上が私のミラノの留学の歴史と私の県芸の繋がりで。

私の恩師である渡邊高之助先生、カンポガリアーニ先生、そして去る7月25日にご逝去されました伊藤京子先生、この場をお借りして諸先生方のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(本会 顧問)



イタリア、レオーネ劇場公演
《セヴィリアの理髪師》
アルマヴィーヴァ伯爵 役

■ マエストロはかく語りき～ラビージャ
先生とスペイン歌曲のキーワード③
服部 洋一 声楽家, 博士 (音楽)

本編はシリーズ連載の第3回にあたる。(第1～2回は同会報創刊号及び第2号に掲載されている)。

東京藝術大学博士後期課程の3年次の6月、その頃、長女はまだ6歳、次女はその前の年に生まれたので、まだ生後7か月もたない頃のことである。二人の娘を家内に託して海外へと旅立つその時、家内はさぞかし心細い思いであったに違いない。それでも彼女は気丈にも、二人の娘たちともに日本に残り、夫の身勝手な夢をひたすら応援する道を選ぶ決意をしてくれたのだった。

東京藝大学部3年次の時にバイロイト祝典音楽祭のコア(祝典合唱団)のテノール歌手としてドイツ(当時は西ドイツ)に渡って以来、筆者にとって大きな海外旅行としては2番目にあたる渡航であった。スペイン政府からの招聘留学生として、公的にはエスクエラ・スペリオール・カント・デ・マドリッ(マドリード高等声楽院)とレアル・コンセルバトリーオ・デ・ムシカ・デ・マドリッ(マドリード王立音楽院)に所属する特待生という立場であったが、筆者の本来の目的は、スペイン屈指のピアニストで、また優れたスペイン歌曲のスパルティートである、フェリクス・ラビージャ師に師事することにあつたことは前号でも触れた。

初めてラビージャ先生のお宅にお邪魔した時のことを、今でも鮮明におぼえている。マドリードの中心地近くのメトロの駅、アルグエジェス Argüelles で降り、マドリードを代表する高級デパート、コルテ・イングレース Corte Inlgés の横を通り、ガスタンビーデ通り Calle Gaztambide にある、師のお住いのマンションのインターホンで日本から来た Yoichi Hattori

であることを告げると、ビーッという音とともに鉄扉がガチャンと音を立てて開き、エレベーターで階上へと上がっていった。日本から師のことを心底憧れて、はるばるここまでやって来た日本青年の胸は高鳴り、もう爆発寸前であった。音楽院の飛び級入学テストを受けに行った少年イサーク・アルベニスが、受験待合室で気持ちを紛らわすために持ってきたボールで遊んでいるうちに、その部屋の大鏡に当てて割ってしまい、慌ててその場を逃げ去り、入試を放棄したというエピソードが脳裏によみがえってきた。だが、続いて「勇気のない人は幸せになれる!」という人生の師の言葉が思い出され、「よしっ!」と、まなじりを上げたところでエレベーターの扉がサッと開いたのだった。

目の前に恰幅のいい、胸板の熱いマエストロがにっこりして立っている。“Buenas tardes, maestro, me llamo Yoichi. ¡Encantado!—こんにちは、先生、ヨーイチといいます。始めまして、どうかよろしくお願ひします!”と手を差し出すと、マエストロも“¡Hola Yoichi, soy Felix, encantado! やあ、ヨーイチ、僕がフェリクスだよ。よろしくね!”と筆者の差し出したその手を、柔らかく厚みのある暖かい手で包んでくれた。

その日の最初のレッスンは、まずはレッスンの受け方から伝授された。「説明するからよく聞くのだよ。もし1曲が終わって、もう一度その曲を僕とさらいたいと思うときは“¡Otra vez, por favor!”(オトラ・ベス, ポル・ファボール!—もう一度お願ひします!)”と言いなさいね。逆に、その曲は終わりにして、次の曲へ進みたいときは、”¡Seguimos, maestro!”(セギーモス, マエストロ!—一次の曲お願ひします, マエストロ!)”と言えればいいんだよ。君が納得できるまで、何度も Otra vez といえば、何度でも教えてあげるからね」...そしてその日に歌ったのが、その名も初めてのレッスンにふさわしい、J. ロドリゴの小品“Canción de grumete 見習い

水夫の歌”。その前奏のピアノが始まった途端、その小気味よく切れ味のよい 32 分音符と、ギターを模倣したファルセータ（パッセージ）の繊細さを聞いた途端、「ああ、僕は今スペインにいる！」と初めてこの褐色の、イベリアの大地を脚で（といってもここはマンションの上階ではあったが...）踏みしめることができた気持が沸々とわいたのだった。

この思い出話、どこまで続くのだろうか？師が亡くなってまだ数年ほどしか経っていない今、当然のことながら。師のキャリアの全貌は、まだどの音楽辞典にも詳しくは載っていない。さすれば、師のもとで薫陶を受けてきたこの自分こそが、己が知る限りのラビージャ像を語るべき義務があるとも感じている。

政府の給費留学生としてわたってきた異国の地では、公共教育機関に所属しなければならない。そうこうするうち、2~3 度目のレッスンの時だったと思うが、ラビージャ先生からも、マドリードのコンセルバトリーオ（王立高等音楽院）やエスクエラ・スーペリオル・デ・カント・デ・マドリッ（マドリッド高等声楽院）などの声楽コースを受験するために、いくつか受験曲を用意しなければならないと告げられたのだった。「ヨーイチは例えばドイツリートはどんなものが歌えるの？」というマエストロに、ヴォルフのスペイン歌曲集や、リヒャルト・シュトラウスの歌曲ではどうでしょうかと答えると、曲名を聞いてマエストロは楽譜をさっと用意してくださり、師の伴奏で、試しにシュトラウスの “黄昏の夢 Traum durch die dämmerung” を歌ってみたところ、「ヨーイチ、いいじゃないか！うん、これならいける！」と太鼓判を押してくださったのだった。当時は、マエストロはソプラノ歌手のアナ・イゲーラス女史と暮らしておられ、この事前オーディションを、エスクエラで教えておられるアナ先生も傍らで聞いておられた。アナ先生も首を縦に振ってくださり、「ねえ、あなた、これならヨーイ

チは試験を受ける必要はないわ。私たち二人の推薦ということで大学に掛け合ってもらって入れてもらいましょうよ！」という話になってしまった。そのようなわけで、筆者はコンセルバトリーオでは、ラビージャ先生の声楽演習を受講し、エスクエラではアナ先生の声楽レッスンと、フェルナンド・トゥリーナ先生（20 世紀スペインを代表する作曲家ホアキン・トゥリーナの孫にあたる方でピアニスト。後にエスクエラ・スーペリオル・デ・カントの学長になられた）にレパートリー・ビルディングのためのレッスンを、上述した特待生として受けることになったのであった。東京藝大で、畑中良輔先生の下で学部時代よりドイツリート史に沿って、リート唱法を徹底的に叩き込まれたことは、そのまま世界で通用するということが証明されたような気がし、日本にいる畑中先生に感謝でいっぱいになった。世界のアーティストと数知れずコンサートをされてきたラビージャ先生からも、この時のリヒャルト・シュトラウスをどこも直されることもなく、コンセルバトリーオの試験をパスできたのだから、「畑中先生、先生から習ったことはまさにインターナショナルな芸術的歌唱でした！」と心の中で叫んだのであった。

もちろんスペインに来た本命の理由は、ラビージャ先生との個人レッスンを受けまくりたい！というところにあっただけで、マドリードの 2 つの大学に通いながらも、毎週のプライベート・レッスンは欠かさず通ったのだった。ちょうどコンセルバトリーオのラビージャ先生の授業をとっていた日本人の留学生で、西川さんというピアニストがいて、彼女もラビージャ先生のピアノレッスン、特にスペイン歌曲伴奏法のレッスンを受けたいと望んでおり、彼女からの提案で、彼女がピアノ伴奏を習う時の歌手としても、僕は常に随行し歌うお手伝いをする事にもなった。このことで僕は、自分自身のレッスンの他に、さらにオプションで、マエストロのレッスンを受けられることとなり、歌とピアノのアンサンブルが生命のスペイン歌曲の

ピアノは、どのように伴奏すべきであるかという視点からのレッスンも、幸運なことに受けることができるようになったのであった。

ある日、西川さんとともに、バスクの作曲家ヘスス・グリーディの「カステイージャ語による6つの歌」のレッスンに入った時のことであった。レッスン室に入り、西川さんは生徒用のグランドピアノに腰かけ、その横にラビージャ先生が座り、この曲集の白眉ともいえる第4曲「お前のくれるハンバミの実は欲しくない No quiero tus avellanas...」を歌いだしたのだった。ところが何ということか、僕は、この曲のあまりの美しさに、始まってすぐから、図らずも目から涙がこぼれ出し、泣き出してしまい、とうとう嗚咽を止めることができなくなってしまった。当然ラビージャ先生は西川さんに弾くのを止めるように言い、レッスンを中断して、マエストロは僕に「おや、ヨーイチ、君はそれほどこの音楽の美しさに感激してしまったのだね?」といい、「二人ともここで少し待っていなさい」と奥の方へ引っ込んでしまった。僕は近くのソファに腰かけ、西川さんに「泣いてレッスンを中断させちゃって、本当にごめんなさい。貴女のレッスンなのに。申し訳ないです。

でも涙が止まらなくて...」と語っていると、ラビージャ先生が、お盆の上にクリスタルのグラスと、ミネラル・ウォーターの入ったパックを載せて、キッチンから持って来てくださったのである。

そしてグラスに冷たい水を灌ぐと、僕の肩に手を載せ、「音楽は、本当にこのように、時折、我々に得も言われぬ感動をもたらしてくれるよね。そんな時だよ。自分は音楽をやっている本当によかったと感じるのは...」という言葉をかけてくださった。涙がまだ止まらなかった自分は、この言葉にまた泣いてしまったが、マエストロから頂いた水を飲むうちに心が静まり、またレッスンを再開し、今度は最後まで涙をこぼさずに歌うことができたのだ。このときのことは、この曲の歌詞にもある“Se las llevó la corriente... de las cristalinas aguas... クリスタルの(ように透き通った)水の流れが、それら(君が語った愛の言葉)を持ち去ってしまった...”と相まって、今でも決して忘れることはできない。

歌の指導に対して世界一シビアーな師は、また同時に人の心の扱いにおいて世界一愛情に溢れた方であった。

「その4」に続く
(本会 理事)

ラビージャ先生 と アナ先生



■ 音楽の基礎勉強～ピアノの有効性～

武田 光史 ピアニスト

神奈川県横浜市に住んでいた私は6歳からピアノを鈴木トヨミ先生（中村透先生の国立音大大学院時の同窓生）に習い始めました。はじめはバイエル、ハノン、プレ・インヴェンション、ソナチネなどを与えてくださり、のびのびと、楽しく中学2年まで通いました。鈴木先生はピアノと同時にソルフェージュの基礎、ぽこあぽこ（楽典の手ほどき）、聴音などを毎回取り入れてくださいました。

小学3年生ごろからは自宅にあったクラシックのレコードをたくさん聴いて、音楽の時間で習い始めたリコーダーで吹けるように編曲し、クラスメイトと演奏して楽しんでおりました。中学2年の時に平塚久子先生の門下生になり、バロック、古典派、ロマン派、そして近現代のピアノ曲を勉強しました。高校一年の時、平塚先生が旦那様のお仕事の関係でボストンに移住されることになり（現在もボストンの大学で教えていらっしゃいます）、鹿目美智子先生を紹介してくださいました。

中学校3年生の時に合唱コンクールで指揮をしたことが楽しかったということレッスンの折に平塚先生に話していたらしく、指揮の勉強を始めるなら早い方が良くからと、親友の榊原栄先生をご紹介くださいました。榊原先生はトロンボーン奏者、作曲家、編曲者、そして当時はオーケストラアンサンブル金沢の指揮者をされておりました。鎌倉市扇谷の榊原先生のご自宅に伺うと、東京藝術大学指揮科を目指すなら遠藤雅古先生に師事した方が良く、さっそく遠藤先生を紹介してくださいました。

高校に入学後暫くして初めて運動部（陸上部）に入部し、夏休みは部活動に明け暮れておりましたが、秋になって遠藤先生の門を叩き、3年半にわたって千葉県市川市大町の梨畑の真ん中にあるご自宅まで、プライベートレッスンに通うことになりました。

遠藤先生は多くの方々から遠ちゃんと呼ばれ親しまれておりました。毎週日曜日の午前10時ぴったりに門下生たちと玄関をノック、お昼を挟んで午後二時頃までのレッスンでした。遠藤先生は藝大の声楽科、クラリネット科、指揮科を卒業され、そのままずっと、あと一年でご退官という1999年4月初旬に急逝されるまで、藝大指揮科で大野和士氏を始め、多くの優秀な指揮者を育てられました。

レッスンはたいてい三～五名の合同で行われ、まず叩きといわれる指揮の基本的な動作、二拍子、三拍子、四拍子、六拍子等の図形を練習し、一人が指揮をして、残りは2台のピアノに分かれて、連弾譜やオーケストラのスコア、パート譜を手分けして弾くのですが、教材は実に多種多様でした。大学受験の課題曲が発表される秋からは、ベートーヴェンやウェーバーの序曲、モーツァルトの交響曲やセレナード、ディヴェルティメント等を先輩方や仲間達とアンサンブルすることは、厳しい中に、とても幸せな楽しいひとときでした。

受験の時期が終わり新年度に入ると、教材は歌曲が多くなっていきました。通年でコールユーブンゲン（後半は暗譜）やコンコーネ 50番、40番、マルケージ等を持っていくのですが、遠藤先生は勉強したところまで聴いてくださり、短期間で次々に課題を戴くのが楽しみでした。コールユーブンゲンは平井康三郎先生が伴奏をつけられた全音版を使用していました。多くの日本歌曲、シューベルトの美しき水車小屋の娘と冬の旅は全曲、白鳥の歌は抜粋でしたが、私たち学生がピアノパートを弾くと遠藤先生が歌ってください、それを指揮する等、何でも教材になりました。魔王等、伴奏と同時に歌も歌いました。シューマンの女の愛と生涯、詩人の恋も全曲、ミルテの花等から抜粋で有名な曲を、それが終わるとブラームス、リヒャルトシュトラウス…大学受験の課題曲が出る秋まではそのように、オーケストラ曲以外の曲も一通り触れることが許され、高校生でしたが、毎週

どれだけ先に進めるか楽しみでした。鹿目美智子先生のもとでピアノも、ベートーヴェンやショパンのソナタ、バラード、ブラームスのソナタ等いろいろ勉強させて戴きました。本当に触れる程度ですが、いろいろな楽曲に取り組みさせて戴き、良い経験をさせて戴きました。

遠藤先生にはオクスフォード大学出版の赤いスコアリーディングの本も毎回出来るところまで聴いて戴き、遅れ馳せながら高校3年になると同時に安藤久義先生に師事して和声や楽曲分析の勉強も急ピッチで始め、週二回は成城ソルフェージュ研究会にも通い、指揮科を二回受験しましたが、残念ながら受かりませんでした。指揮の難しさを痛感し、半年程音楽を離れた時期もございましたが、そのお蔭様で自分が本当は何をしたいのか、何をすべきなのか見えて来ました。

今度は東京藝術大学ピアノ科を受験することになり、再び榊原先生を通して日比谷友妃子先生をご紹介戴き、一年間、バロック、古典派、ロマン派、近現代の曲に加え、ハノン、ツェルニーやショパンのエチュードを中心に勉強させて戴きました。その年の秋には、平塚先生のご師匠、ヴィクター・ローゼンバウム先生が来日され、鎌倉にてレッスンをして戴き、翌春には運良く東京藝術大学ピアノ科に合格が許されました。

東京藝大時代の恩師、平井丈二郎先生と渡辺健二先生、沖縄県立芸術大学大学院時代の恩師、岩崎セツ子先生には、現在に至るまで大変お世話になっております。

話は前後しますが、1994年の冬、指揮科の先輩に誘われて、東京で開かれていたウィーン国立音大指揮科の湯浅勇治先生の指揮法セミナーを聴講させて戴きました。多くの優秀な指揮者を育成された湯浅氏の、ベートーヴェンのシンフォニー全曲をはじめ、シューマンのピアノコンチェルトやモーツァルトの魔笛等の課題曲から、難しい箇所を中心としたレッスンは、大変に的確かつ魅力的で、とても勉強になり、今でも裨益するところが大きいです。

歌や指揮の勉強におきましても、ピアノは本当に便利な楽器で、ピアノを弾きながら歌うことで音程が格段にとりやすくなりますし、ピアノがないところでも、ピアノの鍵盤をイメージしてピアノを弾くように指を動かして歌うと、音程がより取りやすくなると思います。ハノンなどの練習曲も声を出して歌いながら弾くことによって、ソルフェージュ(視唱)能力がアップすると思いますし、バッハなどの器楽曲も声を出して歌いながらピアノを弾くことによって、音楽が体に染み込んでくる気がいたします。

ピアノも指揮も歌であると思います。歌を愛する如く、ピアノ、そして指揮にも親しんで戴きましたら望外の喜びでございます。

(本会 理事)

遠藤先生(写真左手の眼鏡の方)が師匠のチェリビダッケ先生(写真中央右)を東京藝術大学にお招きして、オーケストラのレッスンをされた時の写真



■ ヘルマン・ローランド先生からいただいた至高の学び
仲本 博貴 声楽家

ミュンヘン音楽・演劇大学大学院を修了した私は、スイス・チューリッヒ在住のバリトン歌手ローランド・ヘルマン先生の門戸を叩くこととした。

ヘルマン先生との出会いは全くの偶然とも言えるものであった。

ヘルマン先生はチューリッヒ歌劇場の専属歌手である傍ら、カールスルーエ音楽大学の声楽学科にて主任教授を勤められ、演奏者、教育者の両側面に精通した素晴らしいバリトン歌手であった。

私は高校時代よりテノールの声楽教師の下で勉強してきたため、同じ声種であるバリトンの先生の下で研鑽を積みみたいとかねてより考えていた。

ミュンヘン音楽・演劇大学在学二年目を迎えるころ、ドイツで受験を考えていた知人が日本から私の元を訪ねてきた。その知人から、ドイツ各地の音楽大学を一緒に周って欲しいと頼まれ、共にいくつかの音楽大学を訪れる中、カールスルーエ音楽大学にて、偶然にもヘルマン先生のレッスンを聴講させていただくことができたのである。先生との初対面は、まさに驚異的なものだった。身長2メートルのフィンランド人のバスを、これまた190センチを超えるヘルマン先生がレッスンにてご指導されていたのだ。地響きのような低音を互いに響かせながら、二人がレッスンでやり取りをしている光景は、170センチ前後の私や知人にとっては、巨人が異次元で声を出し合っている場に出くわしたかのような衝撃であった。帰りの電車にて、世界の広さに興奮しながら家路へとついたのを今でも鮮明に覚えている。

それから二年後、ミュンヘン音楽・演劇大学大学院も修了した私は、満を持して、ついにレ

ッスンをお願いするためのメールをヘルマン先生へ送った。

すると、「一回であなたの声を理解し助言することは難しいので、三回程レッスンを受ける事は可能ですか？」と返信が来た。そして迎えたレッスン当日、早朝にドイツの国境を越え、メールでいただいたご自宅の住所へと辿り着いた。それから無事三日間のレッスンを終え、チューリッヒを後にしようとしたその時だった。先生が「次も来るのか？」と尋ねてきた。その問いに対して、とても情けない話だが、まさにカツカツの生活をしていた私は苦し紛れに、「月に一回、是非お願いします。」と答えた。すると先生は「レッスンを続けたいのか？」と質問した。「はい！もちろんです。先生の声に憧れています。できるだけ先生の声に近づきたいです。」私も必死に心の内を伝えた。「お前は歌手になりたいのか？」と質問を重ねる先生。「願わくはドイツで歌っていきたいです。」

——すると、先生は「2週間後に来なさい。私はお金は十分にあるし困ってない。だから2週間に一度の頻度でレッスンしよう。今回と同じ様に三日間、三回だ。」キョトンとしている私に「歌手になるんだろ？出世払いな？」ニヤリと先生が言ってくれた。私のお金がない状況を察してくれた先生は、同じ建物内に住んでいるチューリッヒ大学の元学長のお宅の一室を借りて下さり、レッスンの度にそこで滞在させてもらえることとなった。お陰で安心して先生のレッスンへと備えることができた。とはいえ、チューリッヒの物価は非常に高く、毎回財布の残金に肝を冷やしながらミュンヘンからレッスンへと向かったのであるが……。

「Nein! Nicht singen, sondern denken! 違う！歌うんじゃない、考えなさい！」先生は突然ピアノを叩き付けて怒鳴りつけた。教室に響き渡る低い声。レッスンにて、なかなか改善できずに歌い続ける私に向け叱咤の声が飛ぶ。

逆に考え込みすぎて声を出せなくなった私に、「Nicht denken, sondern singen! 考える

な、歌え！」と更に一喝された。先生は時折ピアノの前から腰を上げ、私よりも20センチも高い位置から老眼鏡を鼻に引っ掛けながらのぞき込み、「支えが足りん！！」「響はどこにあるんだ？」と質問してきた。

対照的に私が上手くできた時は「それだ！！なんて素晴らしい声だ！」と大声で褒めてくれた。兎にも角にも、細かく厳しいレッスンが終わると「エヴァ（先生の愛妻）はお前の声が大好きらしい。だから頑張れよ。」と励ましてくれた。先生の奥様は身長が150センチ程の小柄な女性であったが、192センチの大男も頭が上まらない様子だった。

先生はレッスン中に「Resonanz 共鳴」という言葉を多用し、声の大きさでは無く“響く声”を模索することを重点的にご指導くださった。発声練習では、高音部から低音部にかけて共鳴の感覚を「Doi noi noi」というフレーズを用いながら、“D と N”の子音の発音の際に生じる口内や舌先の緊張に響きが巻き込まれることのないように、母音の正確な共鳴位置獲得を求めた。そして、目の上辺り指さしながら「Luft greifen 空気をつかむ」という言葉で表現し、声を“鳴らす”ことではなく息の流れにて“共鳴を促す”ことを徹底的に追及した。また、ドイツ語の曲の指導の際に、特に語尾が少しでも開くと「Geschlossen! 閉じろ！」とこれまた大きな喝が飛んできた。

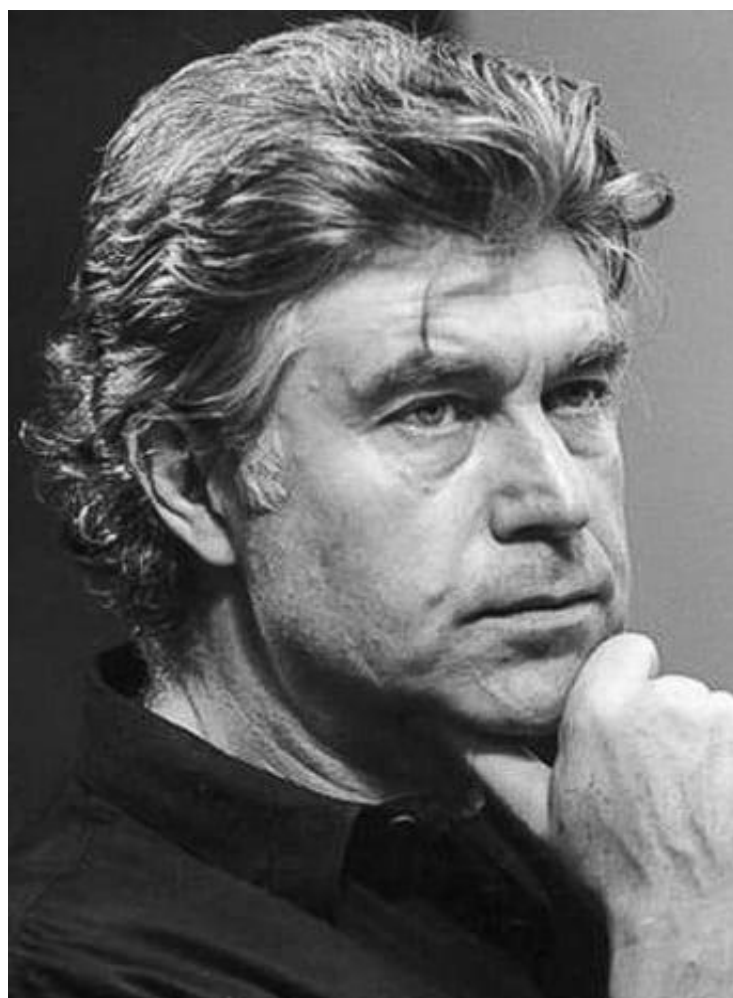
先生の指導力や優しさ、そして何よりも先生の美声が私の憧れであった。当時（現在進行形かもしれない）、歌劇場のオーディションはアジア人の挑戦者で溢れかえっていた。劇場やエージェントはアジア人にはもう辟易したような様子さえ如実に表すほどの状況であったが、先生はその状況を十分把握していながらも、一生懸命に私の可能性を伸ばそうとしてくれた。先生はフィンランド出身の世界的名バス歌手、マッティ・サルミネン氏と親交があり、フィンランド出身の高身長でイケメンの優秀なバス

やバリトンをサルミネン氏からの依頼で指導されて、数々の歌劇場へと送り出していた。このようなマテリアルに満ち溢れた歌手の卵たちを何人も見てきて、更にアジア人が厳しい現状を理解しつつも、ここまで手厚く、そして妥協することなく私に沢山のことを教えて下さったヘルマン先生。先生への贖罪と感謝を、私は忘れることはない。お世話になった先生への思いを綴りたく、今回筆を執らせて頂いた次第である。

現在、故郷沖縄に戻り、今年で十年の月日が流れた。心より尊敬する先生からいただいた至高の時間から得た学びや包容力を、少しでも沖縄に還元できるように、そして、先生の弟子として恥じぬようにこれからも精進したい。

（本会 理事）

ヘルマン・ローランド先生（バス）



■ 声楽家への軌跡-『師』との創造体験Ⅱ
～共演の場での教え・小澤征爾先生～
豊田 喜代美 声楽家, 博士 (知識科学)

多くの優れた指揮者・演奏家との共演体験が私を演奏家として育ててくれたと思っています。その恵みに心から感謝しています。

小澤先生との最初の共演で演奏家としての基本姿勢を叩きこまれ、それまでの自分が壊され演奏家になるのを実感しました。今日まで私が演奏活動を行えているのは、デビュー時の数々の小澤先生との共演体験からの学びが通奏低音のように、演奏する私を支え続けているからだと思います。

小澤先生との初共演は、29, 30 才頃、ベートーヴェン作曲《ミサ・ソレムニス》L.v.Beethoven “Missa solemnis“ (新日本フィルハーモニー/東京カテドラル教会) でした。オーケストラ練習に入った時に「何で、そんなにつまんなように歌っているの?」と、本当に不思議そうに私の目の奥をのぞき込んでつぶやくようにおっしゃいました。私は、つまらないとは全く思っていないので、「何でこんなことをおっしゃるのだろう」と思い、理由を考え、私はきっちりと正確に歌うことしか意識していないことに気づきました。小澤先生は、豊田は譜面は正確に歌うが感性を十分に作動させていないことを見抜かれたのだと思いました。その後の練習時には、顔を覗き込んで目を凝視して指揮をなさりながら爆発的なエネルギーを注ぎ込んでくださるのを感じました。

指揮者『小澤征爾』の目は挑戦し挑むように強く鋭く、魂の中まで入ってくるように感じました。はっきり言って恐ろしいほどの迫力で、逃げるか戦うかを迫られていると感じました。私の負けん気が出てきて、全身全霊で振り絞った魂からのビームで先生の迫力を押し返そうしました。ついに私の中の固い部分 (ちっぽけ

な自尊心かもしれません) が砕かれて魂の中の熱いマグマが吹きあがるのを実感しました。その感覚が、その後の演奏の基点レベルになったと思います。

同じ頃、小澤先生は放送で「楽譜に全てがある。勉強あるのみ。その上で自分がどう演奏したいかだ」と仰っておられました。楽譜を正確に把握し、譜面にこめられた暗黙の意味を捉え、とことん練習を重ねることによって、作品と自分の感性が合致して、本番では思ってもみないような表現が創出されることを、この演奏会で初めて体験しました。この演奏会后「本番が一番良かったね。」とのお言葉を頂きました。小澤先生との最初の演奏作品であるベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》の共演の場で演奏家としての基本を教えて下さったと思っています。

後日、小澤先生がサイトウ・キネン・オーケストラで若いヴァイオリン奏者を指導なさるテレビ映像を見ました。小澤先生は、その奏者の顔の間近で目を凝視しながら指揮をなさっていらっしやいました。その若い奏者は必死の演奏で応えていたのを見て懐かしく思いました。

しばらくして小澤先生とシェーンベルク作曲モノオペラ《期待》Arnold Schönberg “Erwartung” を新日本フィルハーモニーの定期演奏会他で演奏しました。この曲は12音で作曲された、いわゆる難曲と言われています。自分が指揮できるまでに楽譜を読みこまないと、とても演奏できないと思い、必死に自主練習を行い、気づいたら暗譜できていました。どれだけ歌えるようになっているのか不安でしたが、最初の小澤先生との合わせで先生の指揮についていくと、乗り物に乗ったようにスムーズに歌が進んでいく快感があって本番を迎えるのが楽しみになりました。この時の演奏体験が、後の一柳慧作曲モノオペラ《火の遺言》の企画制作演奏につながりました。

小澤先生の指揮でベルク作曲のオペラ《ヴォツェック》マリー Alban Berg “Wozzeck” を歌いました。人間の憐れが壮絶に描かれているこのオペラの自主練習を重ね、役にのめりこんでくうちに精神的にかなり憔悴していたのだと思います。口数も極端に減っていたようで、普段は一切干渉しない母から「どうかしたの？」と声をかけられ、「自分はどうかしている」ことに気づいて我に返り、資料を読んで作品全体への理解を深めようと努めるうちに頭の中が整理されてきて自主練習に向かうことができました。この時、役作りは主観と客観のバランスが必要であることを私なりに学びました。

このオペラの内容は『19世紀初頭・ドイツの小さな軍隊駐屯場が舞台。主人公は貧乏な元理髪師のヴォツェックで内縁の妻マリー（豊田の役）と幼い息子と暮らしている。ヴォツェックはお金を得るために人体実験の被験者の仕事もしており、その実験に加えて過酷な生活苦により精神状態が危うくなっていく。そうした中でマリーは鼓手長と浮気をしてしまう。マリーは自責の念にかられ、罪を悔やんで聖書にすがり、夫以外の男と姦通した女を神が赦し、二度と過ちを犯さないようにと諭す章を繰り返し読む。』

この場面は、マリーがここ数日会いに来ないヴォツェックを想い、言い知れぬ不安に駆られ、自責の念を抱きながら聖書を読むもので、私にとってはマリーの魂の慟哭と神の救いへの祈りを自らの心と身体で体験するものになりました。この時の間奏曲のオーケストラ演奏はそれこそもの凄いな名演で、社会的にも高い評価を得ましたが、私自身も非常に感動しました。人間の憐れさと救いへの強い希望を、これほどまでにオーケストラが歌って表現した演奏を、後にも先にも私は体験したことがありません。

このオペラの内容の続きは次のとおりです。『ヴォツェックはマリーを連れ出し、東の空に

不気味な赤い月を見て「あれは血の色だ」とマリーに眩し、ナイフでマリーの心臓を一突きし、マリーは絶命した。ヴォツェックはナイフを捨てようとして池の奥へ奥へと入っていき沈んでいった。子供たちが遊んでいるところに子供が駆けてきて「マリーお婆さんが死んでる！」と言い、子供たちはマリーの子供に「お母さんが死んだって！」と言い、池の方へ走り出す。マリーの子供は、少しの間1人で遊んでいたが皆の後を追って池の方へ走っていく。幕。』

なんとも壮絶な内容であり、ベルクの音楽はその内容を十二分に描き出したものと思いました。

鼓手長役の歌手経由で、小澤先生が「豊田さんは表現力が凄い」とおっしゃったことを聞き、このオペラの小澤先生との共演で私の表現力が育ったことが解り、嬉しく、自信になりました。後に、ウィーンフィルハーモニーの定期演奏会時に、主席チェロ奏者の隣で学生奏者が顔を真っ赤にして必死に演奏しているのを見ました。

『共演の場で師匠からの教えを受ける伝統』だと聞き、私は正に同じく、共演の場で小澤先生の教えを受けてきたことを確信しました。

幼い時の音楽体験を重要視している小澤先生はサイトウ・キネン・オーケストラの活動で長野県の小学校などでご奉仕の演奏会を行っています。ベートーヴェン交響曲第九番で共演させて頂いた時には、場所が豪雪地帯で空が上に細く見えるような高い雪の壁を初めて見て驚きながらバスで移動し、ドレスの下に長靴を履いての演奏になりました。

体育館の平土間に座って、同じ平土間で指揮する小澤先生の背中を見ながらオーケストラ演奏を間近で聴いていた最前列の子供たちは涙で顔をぐしゃぐしゃにして泣きながら聴いていました。

小澤先生の想いは伝わっていると思いました。幼い時の音楽体験の影響の大きさを、私は

小澤先生とサイトウ・キネン・オーケストラとの共演から学びました。

小澤先生との最初の共演から学んだ、自分の魂と作品をつないでの演奏（楽譜を徹底的に読み、自分の感情を歌詞に寄せ、曲の中に暗黙に込められている作曲家・作詞家の世界観を自分の魂とつないで表現する演奏）がインターナショナルであり、国籍・人種・宗教の差異を問題にする次元を超えて至高の共感に導くことを実感する演奏会を体験する恵みが与えられました。

オランダでの北オランダ交響楽団定期演奏会モーツァルト作曲《モテット KV.165》Mozart “Exsultate, Jubilate” 3回の演奏会全てで全聴衆のスタンディングオーベーションを頂いた素晴らしい演奏体験でした。小澤先生はじめ諸先生方のご指導に深く感謝しました。またブーレーズ作曲《プリ・スロン・プリ》Pierre Boulez “Pli selon pli”（若杉弘指揮、東京都交響楽団）日本初演時、見慣れた楽譜とは異なる譜面に加えてオケスコアで演奏するという難曲を自分なりの表現にまで持って行くことができたのも徹底して楽譜を読むこと、ひたすら練習を重ねることで必ずどんな曲も演奏できることを信じさせてくださった小澤先生のおかげです。

小澤先生の多くの優れた演奏家との交友関係は知られています。世界的チェリストのロストロポーヴィッチもその一人で、OZAWA=ウインフィルハーモニー定期演奏会の、ロストロポーヴィッチのリヒャルト・シュトラウス作曲《ドン・キホーテ》Richard Strauss “Don Quixote” を夫と聴きました。

NHK のロストロポーヴィッチのドキュメント番組で、ヨハネ・パウロ二世からの「あなたは自分のしていることが天国への階段を上っているかどうかを思ってください」の言葉に「私は天国への階段を上っていきたい。時々は、一段二段と降りてしまう」と言っていました。

私と夫は、ロストロポーヴィッチ夫妻の生き様とヨハネ・パウロ二世とのやり取りに感動したことを、演奏会後にロストロポーヴィッチに告げました。

その時ロストロポーヴィッチ氏は、反射的に、とても強い力で夫と私を、一人ひとり抱きしめてくれました。驚きました。私は深い情を感じて思いがけず涙が出ました。NHK の番組内容は、世界的なソプラノの妻・故ヴィシネフスカヤが亡命する夫に従って祖国を離れ最期まで夫を支えて共に生きた芸術家ご夫婦の歴史でした。私はロストロポーヴィッチの強く熱い抱擁に、ご夫妻の情愛を感じました。私たち夫婦にとって忘れられない素晴らしい思い出です。

小澤先生の活動を拝見すると、若い人への音楽教育への情熱、音楽家でなく音楽に関係ないところにいる人とも音楽を通して共感し合いたいという願いを持っているのが、私なりに解ります。師と仰ぐ小澤征爾先生の『音楽演奏の共感』を私なりに演奏と教育とで微力ながら感謝と共に実践していきたいと思っております。

私は期せずして、音楽家を目指していない学生さんたちに『声楽・身体運動科学』を通して歌唱演奏を指導する教育の場が与えられました。私の音楽演奏の場での創造体験と知識科学が基盤になっており、身体運動科学者と共に担当しています。学生が『自分で自分を育てる』という意識が持てる授業でありたいと考えています。

次号では、上記の声楽と知識・身体運動科学を用いた創造性支援の授業内容と、声楽家の豊田を知識科学博士に導いてくださった福岡のホスピス患者さんの歌の力についてお伝えさせていただきます。

オペラ《ヴォツェック》リハーサル風景 左から実相寺昭雄(演出)松原千代繁(当時新日フィル事務局長)小澤征爾先生、筆者(マリー)多田羅迪夫(ヴォツェック)秋葉京子(マルグレート) 写真提供：木之下晃アーカイブス



■ 首里城破損瓦等利活用による舞台空間の創造と琉球古典音楽パフォーマンスアート

山内 昌也 琉球古典音楽家

はじめに

2019年10月31日深夜、突如焼失した首里城正殿等を含む多くの建物と文化財等が失われ、人々に衝撃と悲しみを与えた。しかし、早期から復元への取り組みが行われ、2026年に正殿が再び甦るとの情報が公表されている。

琉球古典音楽を始めとする、琉球伝統芸能はまさに首里城があったからこそその「芸術」であり、高貴な“うとういむち”（おもてなし）は外交のツールであった。儀式等の際は、正殿前の「御庭」（うな一）に舞台を設置し、踊奉行（うとういぶぎょう）たちが上演していた。今回の焼失により「聖地の消滅」ともいえる耐え難い思いが、演者たちに広まった。

その後、県知事公室特命推進課から発令された「首里城破損瓦等利活用アイデア募集」に筆者はヒントを得て、ハイブリッドプレストレストコンクリート（HPC）に破損瓦を配合し、さらには琉球びんがた^内の図柄を施した「1間×1間」（180 cm×180 cm）の舞台空間を制作し、その上で琉球古典音楽（歌三線）を演奏するというこれまでにない「琉球古典音楽パフォーマンスアート」を行うことを考案した。

演奏のコンセプトは「奉納」。首里城復興への想いと、歴代国王王妃への敬意を込めて表現する。なお、舞台空間はあらゆる場所に設置することができ、設置した場所が『御庭』化する。そのため今回の取り組みを『Una-』プロジェクトと命名した。

御庭を含む首里城は、琉球王国時代の政治・経済・文化の中心地であり、同時に首里杜御嶽（すいむいうたき）に隣接する「祈りの場」である。それらは正殿をはじめとする首里城（公園）すべてが、まさに『御願所』（うがんじゅ）であり、神社仏閣的な神聖な場所なのである。

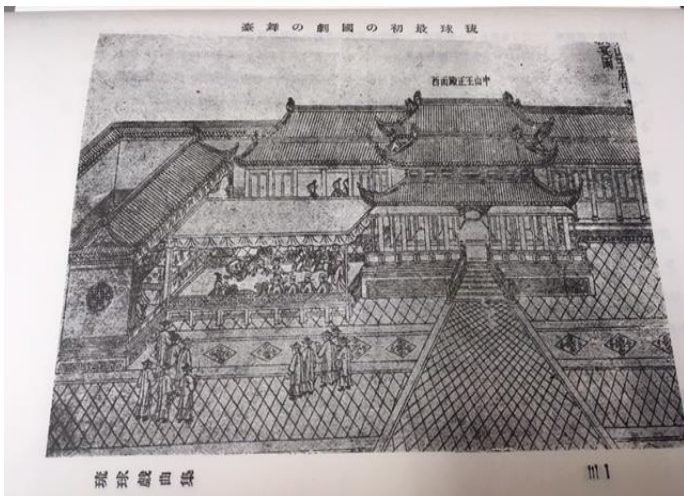
2026年の首里城正殿等復元を目指すとともに「首里王朝文化の理念」及び「琉球王国時代の風土を甦らせる」を追求することとした。琉球王朝文化と技術革新によるイノベティブ・パフォーマンスアートを行うことで、「伝統」と「革新」に迫る。

「Una-」（御庭）とは

琉球王国時代、国王の命令によって琉球伝統芸能は「国学」として、高貴な“うとういむち”（おもてなし）として確立された。当時は、各種儀式の際に御庭（うな一）に舞台が設置された。

儀式後、舞台は解体され、踊奉行（演者）たちは、その余韻に浸るため、祝宴を御茶屋御殿や首里当蔵や桃原の屋敷などで行っていた。

『瞬間芸術・・・』本来なら音楽や舞など、無形に対して使用する文言を、踊奉行たちは、空間も含めすべてを瞬間芸術としてとらえていたのではないか。特に舞台は常設空間を構築することもなく、その都度設置し、解体し、また、舞台だけでなく屋敷＝和室空間でも上演していたとするならば、その「場」が瞬時に高貴な空間を創造していたと考えられる。



『校註 琉球戯曲集』（伊波普猷著より）

考案への思い

2019年10月31日深夜。暗闇に赤々と炎が立ち上がり、首里城正殿をはじめとする建物や文化財が焼失した。琉球王国時代から5回目となる首里城の焼失は、人々の心に深い衝撃と悲しみを与え、沈黙の日々が続いた。琉球伝統芸能＝琉球古典音楽・琉球伝統舞踊・組踊は、琉球王国時代に生み出された国学であり、首里城を中心とした琉球独自の政治・外交を安定・発展させるために重要な位置づけであった。踊奉行たちは、御前儀式だけでなく、外交のプロとして中国・薩摩・江戸に人々に上質な芸を披露した。武力ではなく、文化・芸術を軸に外交を展開したのである。

このように首里城で育まれてきた琉球伝統芸能であったが、首里城焼失により「聖地消滅」の印象さえも与えた。しかし、今回の焼失は“事故”ではなく、首里城や過去の国王たちからの“試練”なのではと考えるのであろうのである。

今、世界中の人々が『新しい生活様式』を取り入れようとしている。しかし、改めて考えてみると、古の先人たちが当たり前のように取り入れていた“生活様式を復元”するだけで十分ではないか。

（琉歌）

走川のごとに 年並みは立ちゆい
繰り戻ち見ぼしや はなの昔

（よみ）

はいかわぬごとくに どうしなみはたちゆい

くいむどうちみぶしや はなぬんかし

（歌意）

流れの早い川のように年月はあっという間に過ぎてしまった。

ふと振り返ってみると昔は花（華）があった。

世界中を網羅している感染症が、我々に試練を与えている。医療の次にヒトが求めるもの……。『芸術』なのである。

首里城破損瓦利活用～人と人をつなぐ～

劇場・ホールなど、大空間での上演が行われている中、小空間や革新的(アート)な空間で上演した琉球古典音楽の演奏は少ない。しかし、小空間での上演は琉球伝統芸能の真髄であり、併せて革新的な空間を創造することは画期的なことである。

今回は、ハイブリッド・プレストレスト・コンクリート(HPC®)による舞台空間を考案した。沖縄で誕生した革新的構造物(超薄肉コンクリート)の上で琉球古典音楽を演奏することにより「伝統」と「革新」に迫る。なおHPCはあらゆる素材を含むことが可能であり、首里城破損瓦等を利活用することで、首里城復興への取り組みと、首里城を中心とした古都首里の理念を再構築することが考えられる。

更に、コンクリートパネルに琉球びんがたの図柄を転写し、デザイン性を高めることを計画している。

これらのことから、この舞台をアート作品として『Una-』と命名し、琉球古典音楽パフォーマンスアートを行う。演奏コンセプトは『奉納』とする。

持続可能な開発目標として

2020年10月31日。世界遺産・国宝「玉陵」(たまうどうん)にて、『Una-』設置による琉球古典音楽パフォーマンスアートを実施した。焼失から1年、多くの方に鑑賞していただいた。

『Una-』プロジェクトは、持続可能な開発目標としている。「SDGs」にも精通し、プロジェクトを通して、首里城復興への想い、高貴な琉球伝統文化を発信する。

首里城焼失によって人々に与えた衝撃をこれから先も忘れることなく、『Una-』プロジェクトを通じて、次世代に『琉球王朝文化の理念』及び『琉球王国時代の風土を甦らせる』ことを伝承していく。そのための琉球王朝文化の技術と革新によるイノベティブ・パフォーマンスアートを行うことでの「伝統」と「革新」なのである。2026年に再びその姿が現すことを願い……。

(本会 理事)

2020年10月31日 世界遺産・国宝「玉陵」と筆者



■ コロナ禍の診療と歌声の維持

喜友名 朝則 耳鼻咽喉科医師, 医学博士

会員のみなさん、こんにちは。

まだまだ新型コロナウイルス感染がおさまりを見せない世の中ですが、いかがお過ごしでしょうか？去年から1年以上自粛が続いていて、ご自身で歌を思いつき歌ったり、生の演奏を鑑賞したりすることがなくなりさぞ淋しい毎日を過ごされていることとお察しします。

我々も職場での歓迎会や忘年会などのコミュニケーションの場もなくなり、学会などの勉強会も全て中止かオンラインでの開催になりました。それだけではなく、日々の診療で新型コロナウイルスに感染するリスクと闘いながら診療を行ってきました。

はじめの頃は未知のウイルスということもあり、予定していた手術は、癌などの命にかかわるものを除いて全て中止となりました。

入院もなるべくさせない方向で協力いただき、外来診療も制限いたしました。しかし、いつまでもそうしておられないため、しっかりと感染対策を取りながら外来診療、入院・手術治療を再開しました。入院前には全ての患者さんにPCR検査を受けていただき、陰性を確認してから入院していただくこととしました。

我々は普段からインフルエンザやノロウイルス、MRSA、結核など、これまでも感染する可能性がある病気に対する感染対策（手指消毒、マスク、ガウン、手袋など）を学んでいますので、対策をしっかり行っていれば新型コロナウイルスもそれほど怖くないということが徐々に分かってきました。

しかし、耳鼻咽喉科はせきやくしゃみなどで一番飛沫感染を受けやすい診療科であることや、若い患者さんなどでは無症状感染の方もおられるため、患者さん全員が新型コロナウイルスを持っていると想定して外来診療を行ってきました(写真①)。気を緩めるとどこで感染す

るかもわかりませんので、そういう意味では私生活でもかなり感染対策を行ってきました。

琉球大学病院では呼吸器内科や救急の先生を中心に県内の新型コロナウイルス感染重症者を受け入れ治療を行っております。コロナ患者病棟に我々も診療で入ることがありますが、非常に息苦しいマスクやガウン、手袋、帽子などつけて、ほんの数分入るだけでもすごく大変です。(写真①)

そんな中、これまで患者さんのために常時治療や看護を行っている医師や看護師には本当に頭が下がる思いです。一人の重症者に数名の看護師が必要になるため負担は相当なものです。

重症患者は、気管内挿管を行い人工呼吸器管理が必要になります。その気管内挿管管理が長引くと気管切開という首に穴をあけてそこから呼吸器につながるといった処置が必要になります。その治療に我々耳鼻咽喉科が関わっています。実はこの気管切開という処置が新型コロナにおいてはなかなか危険とされており、この時に患者さんが咳き込んで飛沫が飛ぶ可能性があり、以前中国でそれを浴びた医師や看護師が新型コロナに感染し亡くなった方もいるという情報がありました。一大プロジェクトとして我々は強力な感染対策を行いこの気管切開を行ってきました。(写真②)

この処置を行ったことで幸いその後元気になられ、退院していった多数の方がおられ、やはりやってよかったと実感しております。

私は今年の4月にはワクチンを打ち終わりました。少し安心感もありますが、変異株の問題もあり、まだ油断はできません。しかし、現在の欧米の状況を見ているとワクチン接種が進んだ国では重症者が減って日常の生活を取り戻しつつあるようですので、日本もワクチン接種が進んできていますので、年が明けるところまでには日常生活を取り戻せるようになるのではないかと期待しています。

声の病気に関しては、不急の範疇に入り、ほとんどの手術は中止・延期されました。実は歌唱のレッスンやイベントなどが減ったことで、声帯結節やポリープなどの声を酷使うことで起こる病気は著明に減少しました。逆に声を使わないことで声帯がやせてきて、声帯の閉鎖が不十分になる声帯萎縮という病気が増えているのを、日々の臨床で感じています。

声帯も筋肉ですので、声を出して筋肉を使わないと手足と一緒に徐々に筋肉がやせてきます。ですから、コロナ禍にあっても、車の中や家の中でもぜひ声を出して歌を歌うようにしてください。

アフターコロナに皆さんが集まって思いっきり歌えるようになるまで、どうぞ日々の発声訓練をやめないようにしてください。

早く皆さんが会場で思いっきり再び歌を歌える日が来ることを願っています。

(本会 理事)

写真①



写真②

